

級編成にのぞむこと

宇田川照子

たいなものになりがちである。最初にもふれたように、園児五人ぐらいの幼稚園と三百人を超えるような幼稚園とは、容易に解決しない問題である。それと同時に組編成に直接関係のある重

今まで五年間、五つの組を受けもってきたが、とてもやりやすかった組もあれば、非常にやりにくかった組もあった。それらを考えてみると、その五つの組は、組を構成している条件が、それぞれ違っていたことに気付くのである。すなわち、構成人数、男女の数、年齢構成、保育経験、などが、組の雰囲気や保育の難易効果などに影響を与えていたのである。そこで私は、過去五年間に受けもった組について、その問題点や望ましかった点をふり返ってみ、合わせて、級編成に対するいくつかの希望を述べてみようと思う。

受けもった五つの組の条件を明らかにするため、次のような表に要約してみた(級[A][B][C][D][E]参照)。結果を先に記すと、この五

要な問題は、教育計画をどのように立案するかという点である。組編成と教育計画とは緊密な連関の上に立たなくてはならないことを書き添えておく。
(東京・松蔭幼稚園長)

級 [A]

級名	きく組(年長組 二年保育 混合組)			
人数	54	男 30 女 24	男児の方が6人多かった。	
年齢	5才 4才	児 児	54 なし	54人全部年長児、生まれ月ほぼ一年間にわたっていた。
保育 経験	一年間 なし	25 29	男 16 女 9 男 14 女 15	二年保育の二年めの児25人、一年保育の新入児29人の混合で、特に二年保育の男児が多かった。
その他	卒業後、最初に受けもった組で、二年保育児25人は前年度他の先生が受けもっていた。			

組のうち非常にやりにくかったのは、級[D]と[A]、やりやすかったのは、級[C]と[E]と[B]、であった。

その原因を考えると、一番やりにくかった級[D]は、五才児と

級 [B]

級名	うめ組(年少組二年保育の年少の混合組)			
人数	47	男	23	男女、ほぼ同数
		女	24	
年令	4才児	男	19	二年保育児40人は、生で 生まれが7月~3月が多かった。
		女	21	
	3才児	男	4	三年保育児7人は、ほ ぼ一年間に互っていた。
		女	3	
保 育 経 験	なし		47人、全部、新入児	
その他	年少組は、他にもう一 組あり、その組はま れのおそい組であ った。			

四才児の混合組であり、四才児に男児が多く、しかも、その中の五人は三年保育児として一年の経験があり、一方、級のリーダーとなるべき五才児の大部分が早生まれ児でリーダーシップに欠けていたこと、などがあげられる。また級[A]は、卒業後はじめて受けもって、私の保育技術が未熟だったことも一つの原因だが、他に、同じ年長児でも、二年保育児と一年保育児の混合であり、しかも二年保育児は前年度、他の先生の受けもちであり、また男児が六人多い五十四人の大人数を、ひとりで受けもっていたこと、などが考えられる。

級 [C]

級名	きく組(年長組二年保育 混合組)			
人数	52	男	27	男女差は、著しくな かった。
		女	25	
年令	5才児	52		52人全部年長児、 生まれ月はおそいもの が多かった。
	4才児	なし		
保 育 経 験	一年間	男	18	二年保育の二年めの児 38人、保育の新入児14人 の混合組
		女	20	
	なし	男	9	
		女	5	
その他	二年保育児38人は、前 年度年少組よりの、 前持ちであった。			

次に、一番やりよかった級[C]は、二年保育児と一年保育児混合の年長組だが、その大部分は、私の持ち上った二年保育児であり、男女の数の差も著しくなかったこと、などが考えられ、級[E]は一年・二年・三年保育の混合した年長組だが、二、三年保育児は、前年度の持ち上りであり、また新入の一年保育児の大部分が生まれ月の早いものであり(四月~九月)、また、女児が多かったこと、級[B]は、二年保育・三年保育の混合した年少組であったが、全部が新入児であり、男女の差も少なく、二年保育児は生まれ月のおそいものばかりだったが、比較的三年保育児がしっかりしていたので、全体的に、

級 [D]

級名	さくら組(年長少混合組)				
人数	47	男	26	男児が5人多かった。	
		女	21		
年令	5才児	男	10	生まれのおそい(10月のお5才児と混合生月生~9月)の早い4才児の組	
	4才児	女	15		
1年間		5	男		5
	女		なし		
経験	なし	男	21	3年保育の二年めの児5人の外は全部、新入の5才児と4才児だった。	
		女	21		
その他					

幼い年少組という感じで、一つのまとまりがあったこと、いいかえれば、条件が比較的等質で一つのまとまりがあって、非常に手がかかる割にやりやすかった、と考えられる。この級の持ち上げが、前に述べた級[C]である。

このように条件の違った五つの組を受けもった経験から、私が級編成にのぞむことは、

まず、人数は、年少組なら三十五人以内、年長組なら四十人以上、男女ほぼ同数で、出来れば女児がいく分多いこと、学令が同じであること(年長児・年少児の混合の無いこと)、二年保育を原

級 [E]

級名	もみじ組(年長組三年保育の混合組) 二年保育 一年保育			
人数	47	男	25	男児が3人多かった。
		女	22	
年令	5才児	47		47人全部年長児であった。生まれは、4月~9月のものが多かった。
	4才児	なし		
保育	2年間	男	5	三年保育の三年めの男児5人
		女	なし	
経験	1年間	男	10	二年保育の二年めの児15人
		女	5	
その他	なし	男	10	一年保育の新入児27人の混合組
		女	17	
その他	新入児27人の他の25人は前年度、さくら組のもち上りであった。			

則として持ち上りとすること、年長組になった時、やむを得ず一年保育児を混合する場合は数人とどめること、などがあげられる。勿論、これは地域の幼稚園でのことであるので、生活環境もほぼ同質で、能力も正常に近く分布しており、性格的問題児も特に多い、ということなど無い、というのが前提である。

最後に一言、まとめていえば、級は、いろいろな条件があまり異質でない四十人以上の子どもたちで構成し、一つの集団としてのみとり、調和が形成されるよう、編成したいものである。

(千葉・市川学園幼稚園)